

TV- BAND

Terra-Viva2012年8月31日インタビュー要約

出演者：山添 源二氏

司会者：TOBIAS 氏

T - (TOBIAS - 司会者) ジュサラに携わるようになった動機を説明して下さい。

Y - (Y - 山添) 1967年、国費留学生として北大、九大で林学を学んで、ブラジルに帰国した直後、サンパウロ州農務局森林院に勤めることになり、カルロスポテリョ州立公園の管理を任せられました。そして、わりによく保全された原生林を見て興味を引いたのは、高い密度で自生しているジュサラ椰子、また林面にはジュサラ椰子の稚樹が密生していることでした。日本での造林学講座で「天然下種更新」についての授業がありましたが、現実にはそんなことはありえないと思っておりましたがそれを目のあたり、そして身近に、林業持続的更新の本質の例を見せられ、ジュサラに関心を持ちました。それから、約40年間、退職するまでジュサラ椰子に関係してきました。

T - 日本での森林について説明して下さい。

Y - 日本国土の約70%は森林に覆われ、土壌、水資源を護っており、飲用水、工業用水、特に水田に必要な水を確保しております。

T - 現在ジュサラから抽出されるパルミットはどうなっておりますか。

Y - ジュサラ椰子はマタ・アトランチカに自生しており、その若芽はパルミットとよばれ、昔から高級サラダなどとして嗜まれてきましたが、1960年代から大量に採取、米国、フランスなどに輸出されることになりました。特にリベイラ川流域においては不在地主の土地が多く、監視が行き届かないこともあり、パルミットの盗伐は当たり前になりました。またジュサラ椰子は植林されなかったことから市場で見られるジュサラパルミットは100%盗伐産物だと言えます。

ジュサラの天然更新は旺盛です。そのため、盗伐が50年間繰り返されておりますが、まだ絶滅しておりません。

ジュサラ椰子の植林も容易で、種子の発芽はよく、初期においてはある程度日陰を必要としますが、樹高50センチ程度から日光を求めるようになります。ただ実際の植林に当たって二つの問題があります。そのひとつはパルミットがとれるまで6年以上かかること、またせっかく育てても盗伐されることです。そのような理由でジュサラ椰子の植林はほとんど行われておりません。

T - この写真はどこの写真ですか。

Y - この写真は セテバラス市、リオプレット部落住民が「小農の収益向上及びマタ・アトランチカの保全を目指した SAF プロジェクト」への支援を行う日本からの NGO VERSTA を迎えて協議しているところです。このジュサラ椰子を中心とした SAF でジュサラ椰子とバナナ、コーヒーなどの組み合わせが予定されております。

Y - ジュサラはほとんど切りつくされ、現在市場に出回っているパルミットはブブンヤ椰子、リアル椰子からとられたものです。ジュサラ椰子の将来性その果実からとられるポルパにあります。アマゾン原産のアサイ椰子と同じようにジュースなどに使われますが、その味はブラジル南西、南部地方に適していると言えます。また、高齢化を防ぐアントシアニナの含有量もアサイ椰子のそれより4倍近く多いことが実証されております。

ユーカリ、松 との混植の部分は削減

T - ジュサラとバナナを混植した場合。バナナの生産が落ちるのではないですか。

Y - バナナの生産が落ちないため、ジュサラを7x7メートルと、広い間隔で植えつけます。ジュサラ椰子をバナナの陰に植え、2-3年後にはバナナの背丈を越え、日照よくなるので、果実をつけるには好条件になります。また、あまり樹高も伸びないので、収穫も容易になります。パルミットの収穫は椰子一本から一度に限られておりますが、ポルパをとる果実は継続的に毎年収穫でき、文字通り持続的な生産が可能になります。

T - この度の VERSTA の支援は小農の生活向上を目的としているようですね。

Y - そのとおりです。バナナとの組み合わせのほかにコーヒー、在来樹種との混植も検討しております。この度の VERSTA の支援について特に挙げなければならない点は、援助金の一部は VERSTA が何度にもわたって行ったチャリティショウを通じて集めた日本市民からの直接のお金だと言う点です。この意味で、写真でははっきり見えませんが、リオプレット集落の住民が引き伸ばしている BANNER には「日本の皆さんありがとうございます」とお礼を述べています。

概要翻訳：山添源二氏